

高田さんと学習院・続

小倉芳彦

タカタ アツシ。タカダではありません、と念を押されたこともある。われわれの前では滅多に笑顔を見せてくれなかった。葬儀の遺影も、なんで俺を撮るのかと挑みかかる風情である。

早朝から午まではモノ書きに専念。午後はテニスクラブ通い。夕暮れを待ちかねて酒席へと急ぎ、先輩・同学・学生との談議を楽しむ。そのベースは終生変わらなかったようだ。

話に妥協は無い。しだいに調子が上がると、汝はそこがいかなのだと、眉根を寄せて「過性の教訓が飛び出る。そういうタカタさんに若者たちは「夫子」の敬称を、われわれ史学科仲間には「アツちゃん」の愛称をひそかに奉っていた。

七十歳定年退職の翌四月一日付で、高田さんは論文以外の雑文をとりまとめ、『喜雨亭雑文』なる一書を刊行した。そのⅡ部に「書信と書評によって綴るわが『自述学術次第』（統篇）」の項があり、彼の著書・論文に寄せられた書信・書評（の一部）が年代順に編まれている。

披読しておどろいた。私の送った私信や活字にした書評類が七、

八箇所も引用されている。「お手紙、文章をいろいろ拝借いたしました」という葉が挟まっているが、完全な事後了承である。読み返すと、その殆どが高田さんの難解な文体に対する「やんわりとした批判」とか、感情移入過多の文章に「もたれ気味」になるとかいった、我ながら嫌みたっぷりな文章なのである。ただ一つの例外は、『中国の近代と儒教』の著書に触れて、

《私（小倉）は今日も自宅の庭の草花が咲きかわって行く様を眺めているであろう高田の姿に、思想のイトナミに堪えている孤独者の影を見る。云々》

と結んだのに対し、「内にかくしているものを射当てられた羞しさと、それを表向きに表現された」面映ゆさを覚える、と応えているのは、あの気難しい高田さんも、私の評言にいささか表情を緩めたのではあるまいか。

逆に高田さんから私に向けた書信・書評類はないか。来信函を捜してみたが、無い。見つかったのは葉書数片だけ。その一枚、83・9・2小平局消印の葉書。この83は1983、昭和58年である。

《昨晚 榎山さんと松枝先生訪問 十月一日（土） 廣島の東南の島の集りのこと きめてきました ご夫妻及び西先生も確約をえしました 何れ主人役の榎山さんから連絡があるはずです 云々》
 松枝茂夫、西順蔵といった長老方への心配り、当時広島大学の学に勤めていた榎山久雄への手配、などについては高田さんは細心周到だった。この時は、広島大学で開かれる学会をダシに、一行で瀬戸内海の鹿島に渡り鯛を賞味しようという計画だった。その折の話は今止め。

高田さんからは葉書しか無かったが、思いがけず差出人M氏の49・1・4豊島局消印の封書が出て来た。この49は昭和だから、1974年正月である。以前『学習院史学』34号〈高田淳先生退任記念号〉に寄稿した文中、東大中文のM主任教授と書いたそのM氏の便箋三枚にわたる書簡である。もはや故人であられるから実名でもよからうが、前文との関係でM氏のままとする。

《芳翰 大晦日に落掌致しました わざわざ御心使いを頂いて恐縮に存じます このたびのこと小生としては高田氏が御自身でも所を得て働きやすいと考えられる道にしたがうのが 御本人のためでもあり 中国研究の全体的な構成の上でも有意義であろうと考えたのですが それはそれとして 私情から申すならば 仰せの如く いま高田氏に去られるのはまことに惜しく 小生が考えておりました東大中文の将来像を修正しなければなりませんただ小生 どうも生来見得を張りたがる所があって 困るの淋しいのと口に出したくないし愚痴も言いたくない となりますと甚だ通俗的ながら顔で笑って心で泣いて というヤクザ映画みたい

なのが自分の役どころかと思っている次第です 云々》
 以下、東大文学部教授会へ辞職願の持ち出し方への悩みが洩らされ、《わざわざ御手紙を下さった御厚意有難く 御返事のついでに少々余分なことまで書きました 御笑い捨て下さい 不一 三日夜》と結ばれている。

私が東洋史の学生だった頃、M氏はたしか中文の助手で、お互い面識があった。高田さんが東大を辞めたいと先ずM主任教授に申し出る際、私は「友人」として頼まれM氏の自宅の門前まで付き添ってあげた。その私がどんな手紙をM主任教授に宛てて書いたのか。

その控えというか下書きが、私の『日録』に残っていた。暮れの二十九日の日付である。

《おそらくこの書信がお手許に着く頃は歳も改まっていることと存じますが、(中略) 今回のこと、残るところ貴学部教授会の御承認が得られれば、学習院大学にとって恐らく新年最大の贈物になることと存じます。信頼するに足る中国語の中心人物がいないうという窮伏に対して、高田氏としては、いわば「義を見てせざるは勇なきなり」の気持で臨んで下さったのだと判断しております。とはいえ、その「義」のために、東大中国文学科に対し私たちが義理を犯したのではないかを憂える次第です。当方での高田氏の受け容れ準備が進むにつれて、私の脳裏に去来したのは、この仕儀になって、いちばん淋しい思いをしておられるのはM先生ではあるまいか、ということでした。(後略)》

敢えて問う。かかる世間私情の往来、君知るや否や。たとえ知るとも、敢えて知らずとす。これぞ知るの極意なるか。